

# 小中連携の英語授業分析・改善 －那須烏山から全国への提案－

事業代表者（教育学部・教授・渡辺浩行）

構 成 員（那須烏山市教育委員会・学校教育課・課長補佐兼指導主事・藤田 繁）

## 1. 事業の目的・意義

小中連携を図る英語授業を当市（那須烏山市）で実践・検証し、当市が小中連携のモデルケースとなることをめざす。また、その成果を栃木県内だけでなく、広く全国に伝え、小中連携の提案をしていく。

## 2. 研究方法（又は事業内容）

### (1) 事業内容

本事業の主な内容は以下の3つになる。

- ①小中の英語授業の録画・分析
- ②当市での委員会・セミナー・個別学校訪問
- ③県内（宇大）及び学会全国大会での成果発表

### (2) 事業計画

①に関しては小学校と中学校の英語授業を定期的に録画・分析し、授業の変容と相違点、共通点を明らかにする。（～平成27年1月）

②については、当市で年4回ほどあるカリキュラム委員会、数回ある英語指導力セミナーに参加し、合わせて①の事業内容を進めるため、個別学校訪問を小中各3回実施する。（～平成27年1月）

③については学会発表（途中経過）と県内発表をそれぞれ平成26年7月、平成27年2月に行う。

## 3. 事業の進捗状況

事業の進捗状況については、上記①～③に分けて報告する。

まず①であるが、小学校では3回に分けて実施することが出来た。その中で授業の変容を捉えることになり、小中連携に必要な観点をいくつか確認するに至った。しかし、残念ながら中学の方は実際に学校訪問し、授業を録画をして分析するということができなかった。日程が合わなかったこともあるが、それ以上に積極的な協力が得られなかったことが原因としてあげられる。

②はほぼすべての委員会、セミナーに参加することになった。しかし、①の進捗状況で触れているように、個別学校訪問に関しては小学校では出来たが、中学校では果たせなかった。

③については、7月の小学校英語教育学会（於：関東学院大学）で発表を行なうことが出来たが、県内発表の方は、先述のように、中学校での授業録画・分析がかなわなかったため、取りやめる結果となってしまった。だが、予定はしていなかったが、福井大学教職大学院フォーラムで、当事業との関連で、これまでの当市における宇大の地域連携事業をまとめ、その成果を発表することができた。

## 4. 事業の成果

事業の成果としては以下の4点に要約できる。

### ①小中連携に向けた小中の英語授業変容

当市市立のある小学校に定期的に個別訪問し、3回の授業を録画して、その3つの録画授業を分析してみた。その結果わかったことは、児童とのインタラクションを継続する8つの要素（下表1）のうち、いくつかの要素が授業変容に大きく関わっていることであった。とりわけ、英語で授業をすることはもとより、児童と英語でインタラクションを図ることに

#### Repetition (Rp)

繰り返し（聞いていることを示し、全体に伝えるために）

#### Elaboration (El)

詳述

#### Further Information (FI)

情報付加

#### Comment (C)

コメント

#### Self-Disclosure (SD)

自己開示（自分について語る）

#### Reformulation (Rf)

さりげない言い換え（正しい、よりよい言い方）

#### Referential Question (RQ)

尋ねないと答えがわからない質問

#### Question to Individual Learner (QIL)

個人への質問（全体につなげるための）

表1. インタラクション継続の8要素

慣れていない小学校教師の場合でも、上記のRp, C, SD, Rf, RQ, QILは取組み易い要素であることが判明した。意識してこれらの要素を使うようにすれば、児童との英語でのインタラクションが楽に継続できるだけでなく、さらにElやFIの要素も扱えるようになるであろう。

同じようなことが中学校の英語授業でも確かめられれば、小中連携にとって大変大きな示唆が得られると予想される。実際、上記の8要素の有効性については、宇大附属小中学校である程度確認できていることでもある。以上については「5. 今後の展望」でも述べることにする。

## ②宇大による地域の教育改革支援

地域の教育改革，具体的には当市の英語コミュニケーション科による英語教育改革を，宇都宮大学が支援するという地域連携の推進である。5年前からこの地域連携に関わってきたが，本年度は当市のカリキュラム委員会，英語教育セミナーに，以前にも増して数多く積極的に関わるようになった。

そのような関わりでわかったことは，短期，中期，長期に分けての地域支援の必要性である。実際，本事業では，小学校の英語授業を録画・分析するという短期的目標は達成できた。また，委員会とセミナーにも1年を通して関わる事ができたのは，短・中期的教育（改革）支援ととらえることができる。同時に，予定したが実行できなかった中学校での英語授業の録画・分析は，今後，中期的支援として位置づけるべき事項という判断になった。

このように，地域支援を柔軟に短・中・長期に分けてとらえることで，ある特定地域への支援だけでなく，いろいろな地域への対応・応用，地域間格差への対応・応用も可能となる。どういうことか言えば，ある地域に必要な支援が別の地域ではすでに終了・完了した支援になることもあれば，ある地域では必要としない支援が別の地域では必要となるということである。つまり，大学自体がそのような異なる地域による異なる支援（連携）の経験値を高めることこそが，広く深い意味での，そして真の意味での地域支援（連携）につながるということである。

## ③地域支援（連携）のモデルケースの発信

本事業は当市の英語教育改に対する宇大の地域支援（連携）となっている。これが一定の成果を収めた場合はもちろん，成果が上がらない場合においても，その問題点や原因を一つの事例として他の地域（県内外，全国）へ発信すべきことがわかった。つまり，モデルケースというのはうまく事業が成果を収めた場合だけでなく，うまくいかなかった場合でも，そういうモデルとして扱わなければいけないということである。

成果を収めたモデルケースとしては次の発信を実施することができた。

### 第14回小学校英語教育学会神奈川大会

と き：平成26年7月26，27日

ところ：関東学院大学（横浜市）

発表：

- 「よりよい外国語活動実現のためのリーダーシップの発揮—豊かなコミュニケーション能力を育てる外国語活動の推進—」  
鈴木博司（那須烏山市立荒川小学校）  
渡辺浩行（宇都宮大学）
- 教師，ALT，生徒のやる気スイッチが見つかった理由—市が変わった，教師も変わった，ALTも変わった，生徒が輝いた—」  
土谷尋人（ジョイ・トーク）  
Kevin Whang（ジョイ・トーク）

### 実践研究福井ラウンドテーブル

と き：平成27年2月27日～3月1日

ところ：福井大学（福井市）

発表：

「那須烏山市英語コミュニケーション科—これまでとこれから—」

藤田 繁（那須烏山市教育委員会）

この2つの発信は，那須烏山市コミュニケーション科における英語教育のこれまでの取組みの成果と今後の課題を発表したものになる。その中で，宇都宮大学と那須烏山市の連携の様子が示され，大学と地域の連携・支援の在り方が提案されている。

前者の発表1は前年度の小学校長会関係大会での発表内容をベースにしており，1つの市の取組みとして，市内各小学校長が共通理解を持ち，それに基づいて各小学校でリーダーシップを取ることを意義を示している。発表2は，ALTおよびALT供給会社の立場，観点から，どのように授業改善を支援し，市全体の英語教育改善・向上に貢献できるかをまとめたものである。

福井大での発表であるが，地域実践支援を研究するラウンドテーブルでの発表になっている。時間をかけた本事業の取組みが，全国からの多数の参加者（大学と地域）にとって具体的な参考例となっており，これは全国に普及する教職員院大学に於いて，今後ますます必要とされる発表だったと言える。

## ④先進例からの学び

当初予定していた授業録画・分析に予定したほど経費がかからなくなったので，代わりに，先進例から学ぶべく，新潟県の取組み，佐渡市の取組みを2回に渡って視察することにした。その結果，次のような示唆を得ることができた。

- 小中連携に限らず，地域連携には地域の学校，教育委員会，教育センター，教師さらには大学が一堂に会して共通理解を図る。
- 教育改善・向上の具体案を練り，実践し，実践内容・方法を振り返り，次の具体案・実践・振り返りへとつなげる。
- 上記a,bを進めるためには，すぐれた実践そのものだけでなく，そこに至ったプロセスも実践者から学ぶ。また必ず，その実践における児童生徒の姿からも学ぶ。
- 児童生徒の姿から学ぶためには，授業を録画していつでもどこでも見られるようにする。  
以上のa～dの中で，やはり児童生徒の姿が一番重要な役割を果たすことになる。どのような授業実践をめざすかは，そこにどのような児童生徒の姿を求めらるであろう。

実際，本事業でも，小（中）の英語授業における児童生徒の様子を授業録画・分析をしており，望ましい姿が見られた時の活動や教師の指導を特定することができた。

## 5. 今後の展望

やはり、本事業で取り組むことができなかった中学校での英語授業の録画・分析を実施することである。このことについては、全国的にも困難なこととなっているようなのだが、是非実施していきたい。

授業実践がしっかりと把握できないままに授業変容、つまり授業改善を図ろうとするのは無理である。そういう意味で、本事業では小学校の英語授業を何回か録画・分析し、改善点（表1. インタラクション継続の8要素）を明らかにしてそれに取り組む事ができたのは、大変幸運だったと言える。

今後、小学校でさらに継続しつつ、中学校でも取組めるようになること、できれば地域の高校でも授業録画・分析・改善が実施できるようになることをめざしていきたい。そのためにも、本事業の成果を何度も丁寧に振り返り、小中連携だけではなく、小中高連携へと広がる取組みを視野に入れていきたいと考える。

最後に、本事業を可能にさせていただいた宇都宮大学、那須烏山市教育委員会、那須烏山市の小中学校の先生方、そして誰よりもその児童生徒たちに心から感謝を申し上げる次第です。